

ぶどうの枝のように
ーヴォーリス、清水安三、ハーバート・ニコルソンー

講演	榎本 恵〔えのもと・めぐみ〕
講師紹介	アシュラムセンター主幹牧師

この門をくぐった者

皆さん、こんにちは。今日はこうして同志社スピリット・ウィークでお話をする機会を与えられたことを心から感謝いたします。私は、今紹介していただきましたアシュラムセンター主幹牧師をしています榎本恵と言います。アシュラムセンターと言いましても、皆さんはほとんどご存知ないと思います。私たちのアシュラムセンターとは、キリスト教の霊性運動です。簡単に申しますと、いつとき日常の生活を離れ、静かに聖書を読み祈ることを旨とする運動です。今から40年以上前に滋賀県近江八幡に設立され、現在も日本各地や台湾、北米、ブラジルなどで続けられています。もし興味がございましたらインターネットのホームページをご覧ください。アシュラムセンターで検索してください。

さて、今日はアシュラムセンターの宣伝のためにここに来たのではありません。私も三十数年前、この同志社の門をくぐり、同志社大学神学部で学び、卒業した者です。優秀な成績で立派な牧師になったと言いたいところですが、実はその真逆でございます。卒業後、私は牧師になる道へは進まず、鈴鹿山系の山の中に障がい者と共に暮らす村がありまして、そこに入村しました。そこを皮切りにタイの難民キャンプ（当時カンボジアの難民の人たちがタイに押し寄せている時代でした）、障がい者の共同作業所などを渡り歩き、最終的には沖縄本島北部にある離島・伊江島の平和運動家・阿波根昌鴻さんの元に身を寄せて、そこで20年余りを過ごしました。沖縄のガンジューと言われる阿波根さんがお亡くなりになった後、ようやく牧師の資格を得て、今からちょうど10年前に近江八幡に帰ってまいりましてアシュラムセンター主幹牧師として働いています。口の悪い友人に「どうせ牧師になるんだったら最初からなっておけばよかったのに」などと言われましたが、今、こうして再びこの同志社の門をくぐる時、新島先生のこの言葉を噛みしめています。「我が校の門をくぐりたるものは、政治家になるもよし、宗教家になるもよし、実業家になるもよし、教育家になるもよし、文学者になるもよし。且つ少々角あるも可、奇骨あるも可、ただかの優柔不断にして安逸を貪り、苟くも姑息の計を為すが如き軟骨漢には決してならぬこと、これ予の切に望み、偏に願うところである」（森中章光編著『片鱗集』『新島襄集』丁字屋書店 1950年 より講演者漢字仮名遣い一部変更）。

私のあゆみなど決して自慢できる模範的なものではありません。回り道をし、道草ばかり食い、あちこ頭をぶつけながら今までやってきた、曲がりくねった私の道ではありますが、ただ一つ新島先生の最も嫌われた「優柔不断にして安逸を貪り、苟くも姑息の計を為すが如き軟骨漢」にはなっていないのではないかと密かに自負するところです。沖縄にいた頃、ある人から「榎本さん、あなたは角の取れた小さな丸い石になるよりも、ゴツゴツした大きな岩のままでいなさい」と言われたことがあります。まさに「少々角のあるも可、奇骨あるも可」と喝破された新島先生のおかげで今ここに立たせていただいていると、私自身は思っています。

さて、私の名前は「恵」と言います。皆さんの中にも、榎本恵先生というのは髪の毛の長い、美人の女性を想像された方がいるかも知れませんが、どうもすみません。なにも、生まれてくる時にこの名前にしてほしいと思って生まれてきたわけではありません。この名前は私の父がつけました。自分の息子に「恵」という名前をつける親は相当、勇氣ある親だと思いますが、おかげで私は随分と苦労いたしました。小学生の時、クラス全体で注文したそろばんのケースの色が、どういうわけか女子と同じピンク色であったり、また病気になるって病院に行きましても、看護師さんが私のカルテを女性の方に入れていたためにカルテが見つからず、喘息でゼーゼー言いながらも長い時間待たされたという経験もありました。この手のエピソードはいくらでもあるのですが、この勇氣ある父親も同じ同志社大学神学部を卒業し、牧師となった人であります。残念ながら天に召され今年で40年になるのですが、学生の身分のまま京都の伏見で牧会を始めるという、大学の先生泣かせの型破りな人物でありました。戦後間もなく保育園と教会を始め、その一生はわずか52年余りでしたが、自らを主イエス・キリストを乗せて歩いた小さな口バになぞらえ、その生涯を駆け抜けていきました。父が亡くなった時、私は高校1年生でした。私たちが家族から食ひ、あちこ頭をぶつけながら今までやってきた、曲がりくねった私の道ではありますが、順番が違うのではないかと言われるような人生でありましたが、しかし今もその生き様は多くの人から愛され、今となつては、この「恵」という名前と共に「お父さん、ありがとう」と感謝しているものであります。実は私の息子も、この同志社大学神学部を卒業し、彼もまた牧師の道には進まず、台湾やアメリカの海外の大学を今も渡り歩いています。もう30歳になろうとしているのですが、ようやく今年、ノースカロライナ大学の博士課程にいくことができました。今からまだ6年間勉強を続けたいといけません。彼もまたDNAというのでしょうか、親子三代にわたって我が道をゆく、そんな私たちを新島先生は天国でどのように思っておられるのでしょうか。

おそらく皆さん方の中にも、親子、いやそれ以上前に、新島先生の頃から、この同志社大学と関係のある方もおられるかもしれませんが。実は、最近になって北海道のある牧師さんから、珍しい卒業証書が送られてまいりました。明治29（1896）年、今から121年前の同志社病院附属看護婦学校の卒業証書です（写真①）。そこには二代目総長の小崎弘道先生のお名前もあります。実は私の母の祖父、私からすると曾祖父の姉がこの卒業証書をもたらした野村増さんです。淡路島の田舎の娘がキリスト教に出会い、看護婦を目指し、創立間もない同志社病院附属看護婦学校に学び、卒業後はハワイへ渡り、その後帰国し、淡路島で助産婦として地域医療に従事したのです。この話は聞いていたのですが、実際、北海道からこの卒業証書が送られてきた時、同志社と縁があることに感動いたしました。

しかし私はこれを紹介するにあたり、ただこのつながりを自慢したり、それに感謝したりすることを目的に言うものではありません。おそらく皆さんの中には、もっと古い同志社とのつながりをもっておられる方もいるでしょう。またそれとは全く関係なく、自分が初めてこの同志社の門をくぐったという方もおられるかも知れません。しかしいづれにせよ、このつながり、それは私たちの側からつながったというだけではなく、この同志社、同じ志をもつ者として同志社の側からつながってくれていたことを知ることが大切なのではないのでしょうか。「一人は大切な人」という新島先生の思いもそのところにあると思うのであります。私たちの意思や計画を超えた、もっと大きな見えないものによって最初から企てられていたのかと思えるほどの出会いとつながり。これが今日皆さんにお伝えしたい大事なことなのです。親子何代にもわたる関係であったとしても、初めて受験し、自ら勝ち取り、自分が初めてこの大学に来たという人であったとしても、実はその背後に見える大きなつながりというものがある、そのことに気づいているか、気づいていないか、それはかなり重要なことなのであります。

今回私は、同志社スピリット・ウィークの講演の題名を「ぶどうの枝のように」としました。これは聖書の中の一節からとっているものです。昨年、なんだかインバクトのある題名が好まれているようですが、私はシンプルに聖書の言葉からそれを決めました。それはヨハネによる福音書15章5節に書かれた言葉であります。「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。人がわたしにつながっており、わたしもその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ」。これは有名なイエス・キリストの言葉です。ここで注目してほしいこと、それはあなたの方の側からだけつながるのではないということです。そうではなく、イエスの側、ぶどうの木の側からつながっているということです。いくら私たちが一生懸命つながろうとしても、イエスの側からつながっていないければ、それは決して実を結ぶものではない。このイエスの言葉は、本当につながるというのは自分だけでなく、相手の側から、すなわちイエスの側から、そして私たち、この同志社につながる者にするならば、同志社の創立者である新島襄からつながるという、このことを私たちは知っておくことが大事ではないのでしょうか。同じ15章には、このような言葉もあります。「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ」。これこそが、この同志社の門をくぐった者一人ひとりの真実なのではないでしょうか。

ぶどうの枝のようにーヴォーリスの信仰ー

さて、この「ぶどうの枝のように」というフレーズは、実は私たち同志社に学んでいる者、また卒業した者には大変馴染みのある言葉であります。「ぶどうの枝のように」という言葉が同志社カレッジソングの中で歌われているのです。

「『ひとつの志』同志社よあなたの名は、まさに一つの立派な目的を表します。あなたの子どもたちを心身ともに鍛え、神と祖国のために生きる者とするのです。愛する母校よ、あなたの子どもたちは、ぶどうの枝のようになり、世界中に遠く広く散らばるでしょう。しかしあなたの教えは心に留まるでしょう」。この「ぶどうの枝のようになり」の部分は、“Shall be as branches to the vine”となります。これは主イエス・キリストの言葉「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。人がわたしにつながっており、わたしもその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ」という聖書の言葉から取られたものと思われます。

この同志社カレッジソングを作詞された方は、ウィリアム・メレル・ヴォーリスです。ヴォーリスは、1905年、滋賀県近江八幡の滋賀県立商業学校（現在の滋賀県立八幡商業高等学校）の英語教師に赴任された宣教師であります。1964年にお亡くなりになっています。約60年の間、滋賀県の近江八幡、アシュラムセンターもそこにありますが、そこを中心にしながら多才な活動をされました。近江八幡という町は古い町ですが、その町の中に突然、このような建物が出てまいります（写真②）。ヴォーリスは英語教師として日本に来られましたが、同時に建築家としても有名な方です。その生涯に、1600カ所の建築物を日本に造られました。京都にも、四条大橋のたもとに東華菜館があります。御茶ノ水にある山の上ホテル、大阪の心斎橋にある大丸、こういう建築物を造られた方であります。皆さん方がいる同志社大学にもたくさんのヴォーリスの建築物があります。相国寺の側にあるアーモスト館（私が学生の頃はアーモスト寮でした）や、致遠館、啓明館もヴォーリスによって建てられたものであります。今回、びっくりするような一つの発見がありました。実はヴォーリスによって、この今出川キャンパス、新町キャンパスを含めた一帯を新キャンパスにというのが、1934年に立案されていまして、これは幻の設計となりましたが、同志社創立60周年記念誌『我等ノ同志社』に、「明日の同志社」という題で見取り図が載せられています（写真③）。計画どおりになっていたら、同志社のキャンパスは全く違ったものになっていたかも知れませんね。関西学院、神戸女学院、この二つの大学はヴォーリスがグランドデザインし、すべての建物の配置を彼自身が設計した大変美しいキャンパスになっています。同志社も関西学院や神戸女学院のような形になっていたかもしれませんが、同志社は雑多ないろいろな建物が、所狭しと建っている方が似合っているなどと思っています。いかがでしょうか。このようにヴォーリスは同志社と関係の深い人であったわけですから。

ヴォーリスの人生をたどる時に三つの節目があると言われています。『ヴォーリス評伝』の著者の奥村直彦氏がこのように書いています。「ヴォーリスの生涯にとって大きな節目と思われることは三つある。それは、海外宣教への召命、教師解任事件、そして日本への帰化である」と。1905年に滋賀県立商業学校の英語教師として着任する前、ヴォーリスは建築の道を目指し、コロラド大学で学んでいました。その時にキリスト教の大きな伝道集會に出会い、そこで本当に不思議な経験をして、行く道を変えるのです。その伝道集會で語っていた講師の顔にキリストの顔が重なり、自分一人に語りかけるように「お前はこれから本当に何をすべきか」という迫りがあったというのです。彼はその迫りを受けて大学の課程を哲学科に変更し、海外伝道への献身を決意。大学卒業後、日本にキリスト教を伝える、そのことを目的としてやってまいりました。それが彼の大きな一つの転換点だったのです。同志社のカレッジソングの歌詞にこうい

う言葉があります。“Tho’ through the world we wander far and wide, Still in our hearts thy precepts shall abide!” 世界中にさまよい歩くかもしれない。遠く、そして広くさまよっていくかもしれない。けれどもあなたの教えは私の心の中に留まっている。それがこの1番の歌詞の中にあり、ヴォーリズの想いだったのではないのでしょうか。100年以上前にアメリカから日本にはるばるやって来た。その彼の心の中にはまさに、いかにどんなに遠くにいたとしても、心の中の支えにキリストの教えが、原理原則が留まっているのだと。しかし、このヴォーリズも初めて日本に着いたその日に近江八幡の駅に立って、「小さな、小さな駅。寒い、寒い」と泣き言のようなことを言うのです。「もう自分はホームシックだ、帰りたい」と。ある意味で私たちと変わらない24歳の若者であったのではないのでしょうか。その彼が近江八幡で英語の教師をして、その他にバイブル・クラスを行います。またYMCA活動を行い、どんどん生徒たちが集まってくるようになったのです。1905年、近江八幡でYMCAの活動が始まり、滋賀県立商業学校の生徒たちが彼のところに来て、話を聞き、一緒にお茶を飲みました。ところがやがて生徒たちの中にヴォーリズの感化を受けキリストを信じる人たちが出てくるようになると、近江八幡の中で大変大きな問題になってくるのです。彼はキリスト教を生徒たちに教えたということで、この学校を解任されます。それは1907年のことです。1905年に来てたった2年間で、自分がこれからこの地でまさに「ぶどうの枝」のようにキリスト教を宣べ伝えることが、日本に宣教する道が絶たれていくわけです。

そしてこの第二の転機の翌年に作ったのが、この同志社カレッジソングだったのです。学校を辞めさせられた後、彼は無職になります。その彼を救ったのが、同じアメリカから来ていた同志社の宣教師でした。ヴォーリズは京都のYMCAの現場監督として働き、糧を得ながら生活していくのです。そんな時に作られた同志社カレッジソングであったということを思いますと、何だかまた違った歌のように聞こえてきませんか。「『ひとつの志』同志社よあなたの名は、まさに一つの立派な目的を表します。あなたの子どもたちを心身ともに鍛え、神と祖国のために生きる者とするのです。愛する母校よ、あなたの子どもたちは、ぶどうの枝のようになり、世界中に遠く広く散らばるでしょう。しかしあなたの教えは心に留まるでしょう」。これはまさに同志社の学生たちに向けて語った彼の歌であると同時に、もう一つ、自分自身への語りかけであったのではないかと私は思うのです。

永遠の素人

実はヴォーリズは、建築の専門的な教育を受けてはおりません。また彼は建築家だけではなく実業家でもありました。近江兄弟社を設立し、メンソレータム（今のメンターム）を日本に紹介し事業としたのがヴォーリズでした。その他にも教育者でもあり、今も幼小中高からなる学校法人ヴォーリズ学園の創立者です。また、結核の人たちのための病院を建て、医療活動もされました。オルガンの名手でもあり、詩人、カレッジソング以外にも多くの詩を作り、詩集が出版されています。ところが実はそのすべてを、専門的な教育、資格をもって行ったではありませんでした。彼はある意味において「永遠の素人」でした。設計についても、事業についても、教育についても、宣教師としても。何ら資格をもたず、自分自身を神さまの道具として自分のもっているものすべてを使いたい、そう願ってなされたのがヴォーリズであったのです。彼の同時代人にドイツのシュヴァイツァーがいます。この人はノーベル平和賞もとられた有名な神学者ですが、医者でもあり、大変なバツハの研究者でもありました。彼はそのすべてに専門的な教育、資格をもって行っていました。彼の残したものは大変偉大なものです。医療でも、神学にしても。しかしシュヴァイツァーと同じほど、否それ以上に多くの人たちの心に響いたのは永遠の素人であったヴォーリズではなかったかと私は思うのです。

彼はその生涯で1600余りの建物を建てました。その中で彼の建築の基本になっていたもの、それは「建築物の品格は人間の人格のごとく、その外観よりもむしろ内容にある」という有名な言葉であります。先ほど写真②でお見せした大きな建物は、ウォーターハウス邸と言われるものです。100年近く前に建てられたものですが、今もお現役として使われています。私は今、その隣にあるダブルハウスに住まわせていただいています。この建物は決して華美な、きらびやかな建物ではありません。あの時代にヴォーリズは家を設計する時、台所から最初に設計したそうです。台所が一番いい場所におくのが彼の設計の基本でした。この家で生活する人にとって台所は何よりも大事なものであります。「建物の品格は人間の人格のごとく、その外観よりもむしろ内容にある」と言った、ヴォーリズ建築の一つの大きな表れではないかと思います。同時にヴォーリズは決して自分のした事業、成してきた業を誇る人ではありませんでした。すべて神さまから預かった、大事な預かりものであり、預かったものを大切にしてい、そのことこそが大事なことでないかと教えるのです。私は、そんな彼の精神の最も根本にあるもの、それはやはりイエス・キリストに対する信仰であったのではないかとと思っています。

ヴォーリズが作った詩集があります。『東と西の詩集』1960年頃に作られた本です。これは、彼が書いた詩集を1冊の本にまとめて出したものです。この本の中で、ヴォーリズの妻であり、ヴォーリズの理解者であり、一番の助け手であった奥さんの一柳満喜子さんという人が序文を書いています。その最初に、若き日にヴォーリズに出会った一人のアメリカ人の牧師がヴォーリズについて語った言葉を、このように記しています。「G. A. ジョンストン　ロス牧師は、メルル　ヴォーリズに出会った際の感想を『この年代には、めったにない珍しい青年だ。彼はイエスを本気で信じている』と述べています。事実、イエス　キリストは、メルルにとって、着手しようとするすべてのことへの、強力な誘因や励みとなっています」。この「本気でイエスを信じている」という言葉は大変重要な言葉だと思います。私たち牧師であっても、「お前はイエス・キリストを本気で信じているのか」と言われた時、答えに窮してしまいます。「このことは信じるけれども、このことは保留したい。このまではイエス・キリストを信じているが、あの復活については少し疑問がある」と、そのように言うかもしれません。ヴォーリズはそれをまさに単純に、そして本当に真剣に信じたのでした。私たちはこのヴォーリズの主イエス・キリストに対する真剣さ、そのことを学びたいと思うのです。

この詩集の中に「手足」と題された詩があります。

「手足」

今日も、わたしを　主のための　手足としてください。

ああ、父なる聖霊―すべてを贖う神よ

あなたの子らが倒れたら　抱き上げ、

如何に彼らが希望をなくし、誤った方向にさ迷うとも

身を誤った者たちを、完き道に導こうと切望し

あなたの忍耐深い呼びかけを嘲る者たちに対しても、

彼らを愛して、怖れと罪の奴隷から　喜んで従う

子供たちと　なることを　切望します。

主よ、あなたのみが　ご存知です。

かれら各々の心が収獲に向けて熟成するときを、

そして完全に降伏した人間の手が

あなたのために　新生を待つ霊魂に届く時を

ああ　そのとき、かれらを引き上げ、導き、そして愛するように

あなたが　わたしを　あなたの手、足、唇としてください。

（1941年12月2日ヴォーリズ詩集『東と西の詩集』より）

この詩が書かれたのは1941年12月2日となっています。お気づきだと思いますが、1941年12月8日、日本は真珠湾を攻撃し、アメリカとの間で戦争が始まっています。この詩を書いたのはその1週間前です。彼は日本人の妻である一柳満喜子さんの籍に入り、この年に日本国籍を得ています。けれども彼はあの時代の中にあって、まさに敵国人として多くの宣教師たちが日本を離れていく中、日本に踏みとどまっていました。彼は日本人になることを選び、そしてあの戦時下、自分が生まれた国とまさに今自分が新しく国民となったその国が争う中において、日本の側に身をおいたのです。それは大変な勇氣でありました。実際、彼はこの時代、近江兄弟社のすべての役職を解かれ、半ば幽閉のような形で軽井沢に留め置かれます。まさに彼は手、足、唇を縛られているような状態であったわけです。自分がそのところで成そうとしていること、一生懸命神のために働こうとすること、そのすべてのことが、この戦争で止められている。そのような中で彼はこの詩を詠んだのであります。「今日も、わたしを　主のための　手足としてください」。彼の心の中には、まさにあのイエス・キリストを本気で信じている青年として、自分が学校の先生として来たはずの近江八幡から追放された中であっても、この国を愛し、この国の人々のために、神のために働こうではないかと歌ったように、彼は神を信じ生きていたのです。このことは大変重要なことではないかと思います。神と人にとぶどうの木のようにつながっていくためには、一人ひとりの覚悟としての信仰というものが大切なのです。

夢―清水安三の希望（のぞみ）―

次に私がぶどうの枝につながっていく人として掲げたいのは、桜美林大学創設者の清水安三先生です。清水先生は1891年に現在の滋賀県高島市新旭町に生まれ、1988年に天に召されていきました。長い人生を歩まれた方です。この方も波瀾万丈の人生を送られました。桜美林大学チャペルの前に清水先生の像と、桜美林大学設立認可の時に先生が詠んだ歌碑があります（写真④）。「夢、大学の設立こそは少き日に新島襄に享けし夢かも」。これが清水先生の桜美林大学設立の時の感慨深い言葉でありました。清水先生は同志社大学神学部を卒業された大先輩であります。先生は1975年、同志社大学の名誉神学博士号を授与されました。すばらしいですね。当時、先生と一緒に名誉博士になったのは、あのパナソニックをつくられた松下幸之助さん、ハンセン病療養施設のために生涯を捧げられた看護婦の井深八重さん、大阪水上隣保館の社会福祉に貢献された中村遙さんです。この三名と共に先生は名誉博士号を授与されます。その時の総長である住谷悦治先生が清水先生のことをこのように言われました。「桜美林学園のキャンパスの真中には『夢、大学の設立こそは少き日に新島襄に享けし夢かも』と刻んだ碑が立っている。新島精神はついに東京にまで進出するに至った」。これが清水先生に対する名誉博士号授与の際の総長の言葉でありました。

先生のご出身は滋賀県ですから、まさに何の縁もゆかりもない関東の地で、戦後まもなく大変な苦勞をして学校を作り、認可され、その時に語った言葉が、まさに夢が実現した「大学の設立こそは少き日に新島襄に享けし夢かも」という言葉であったわけです。実は清水先生はこの同志社大学で、ある時期、教職として働いていました。ところが、あることをきっかけにして、同志社を辞めさせられるという事件が起こるのです。先生は1915年、同志社大学神学部を卒業なされた後、宣教師となり、中国へと伝道に旅立たれました。その後、中国で起こった大干ばつで多くの子どもたちが餓死寸前の状態になったため、子どもたちを収容する施設を作り、後に北京郊外に女学校（崇貞学園）を設立されます。中国に渡り、最も貧しい子どもたちのため

の学校を作り、それを経営なっていた。先生のご本を読みますと、どうやってお金を集めたのかということばかりが書かれています。ご苦労なされた。さまざまところに行って募金を求める。そのために骨を折られた。その間に同志社大学で講師として、野球部顧問として就任する時期があります。この時も同時に崇貞学園の面倒を見ています。学園のために一生懸命資金集めをしなければならなかったわけです。先生は学園の資金集めのために、崇貞学園の生徒たちが作ったレース編みを売ってお金にしようとした。同志社の大学や宣教師の人たちに労作を売りますが、そのことが大学の知るところになります。ある日、先生が労作のレース編みを売っていたところが、当時の総長に見つかり、清水先生は呼び出され、同時に野球部の顧問として金銭的な不祥事の責任を取られ、「君は教育者にあらず、商売人なり」という屈辱の言葉を受け、同志社大学を辞めさせられているのです。その時のことを先生はこうに書いています。「総長室を出た私は、同志社の鉄門を出て今出川御門から御苑内に入った。私はその鉄門を叩き、同志社が私を育て上げたことを名譽とするときが来るであろう。それまでは決してこの門を再びくぐるまいと、心中堅く誓ったのであった」。先生の自伝『石ころの生涯―崇貞・桜美林物語―』の中に書かれています。一生懸命、中国の貧しい女性たちの学校を作り、その資金を得るために働いていた。けれどもそれを、「お前は教育者ではなく、商売人だ」という言葉をもらって教師の職を解任される。先生はどんな思いでこの門を去って行ったか、想像するに難くないと思います。けれども先生は何の恨みも言うこともなく去って行きます。そして「必ず自分は、この学校が育ててくれたことを名譽なことだと言う日が来るのだ」という言葉を残して。この言葉は失意の中、同志社を去っていった先生が、同志社を名譽に思い、また同時に名譽とされる日が来ることを思われての言葉であったと思います。それから数十年後、まさにその日が来たのです。あの名誉博士という称号を得たわけであります。

清水安三とヴォーリス

さて、清水先生もヴォーリスと非常に関係のある方でありました。滋賀県立商業学校時代にヴォーリスは、滋賀県の彦根、大津でも旧制中学の生徒たちを集めてバイブル・クラスを行っていました。その生徒の一人が、実はこの清水安三先生だったのです。先生は本の中でヴォーリスとの出会いについてこう語っています。「今になってつらつら思うに、私の生涯において、自分にもっとも偉大な影響を与えた人物は誰であろうか。それはやっぱりポリッさんだったと思われてならない。もし私がポリッさんを知らなかったならば、私はあるいはイエス・キリストにも出会わなかった」。

ちょうど、ヴォーリスが学校を辞めさせられ、京都で設計技師をしながら働いていた頃、清水先生はヴォーリスを訪ねます。おそらくヴォーリスは学校を辞めさせられて失意の中にあるだろう、と思って京都のYMCAに訪ねるのです。ところがそこでヴォーリスは、なんと一生懸命、設計図を引いていました。「ポリッさんは夢みる人である。後年、彼が食うに困り、京都のYMCAの新築現場監督をしながら八幡で聖書を講義されたときに、私は一日、京都の柳馬場の現場監督事務所へ行って見た。すると、ポリッさんは、蒸気船の設計をしておられた。そしてその船の名をガリラヤ丸と称して琵琶湖に浮かべ、湖畔伝道をやるのだと言われた。『先生、この船を買うお金はどこにあるのですか』と言うと、与えられることを祈っているのだと言われた」（同書）。１９０５年にヴォーリスは近江八幡にやって来て１９０７年には職を解かれ、失業した状態になっている。そういうところで一生懸命、船の設計図を描いていた。「船を琵琶湖に浮かべて琵琶湖湖畔で宣教に行くんだ」と夢を語っておられた。驚いたでしょうね、清水先生は。びっくりしたと思います。

ところが、その夢が現実になるのです。１９１０年４月、ヴォーリスは、協力者ウォーターハウス船長と共にガリラヤ丸で琵琶湖周辺の農村地帯伝道をします。これが完成したガリラヤ丸の写真です（写真⑤）。ヴォーリスはこの船に乗って琵琶湖湖畔を伝道して行きました。実は、清水先生の出生地である新旭町の隣にある安曇川に、江戸時代の儒学者で、日本の国に大きな影響を与えた中江藤樹の記念館があります。その藤樹書院の参拝録になんと「ヴォーリス、ウォーターハウス」の署名が残っていました。私はこの間、記念館に行きまして、その松本孝太郎名誉館長から「面白いものがあるから見せてあげよう」と、その参拝録を見せてもらってびっくりしました。「大正４年４月27日、藤樹先生に敬意を表するために当寺院を来訪する。彦根・武田猪平、八幡・ヴォーリス、吉田悦蔵、ウオタハウス」と、直筆のサインが見つかりました（写真⑥）。大正４年、１９１５年４月はガリラヤ丸が出航して伝道を開始した年だったのです。伝道開始の日付が分からないため、この時だとは言えませんが、中江藤樹の記念館を訪れたのは、この年の４月でした。なんとも不思議な、想像もつかない、私たちの人間の知恵を超えた大きなつながりがあるように私には感じられます。若い日、ヴォーリスに出会った清水安三、そこで一生懸命描いていた夢物語のようなガリラヤ丸、夢が現実となった時、なんとヴォーリスはあの清水安三先生が愛した中江藤樹のところを訪れていた。神さまの大きな働きが、この中にもあるような気がいたします。

ヴォーリスを表す言葉は「信仰」だと言いましたが、清水先生を表す言葉は「望み」であると思っています。近江兄弟社学園（現ヴォーリス学園）の建物の中に、清水先生の色紙が飾られております。「希望を失わず」、のぞみを失わずと読ませています。解題には、桜美林学園創設者清水安三先生は「生涯、ヴォーリスの弟子」と称し、近江兄弟社学園に対して常に「希望を失わず」と励ましてくださった、とあります。『希望を失わず』は清水先生がお書きになった本の題名でもあります。そこにはこのように書かれています。「『希望を失わず』の一篇を、私はなおも希望を失わずという心持で世に送り出す。表紙に掲げた絵は英国の画家ワッツの名画『希望』の模写である。目は隠され、足は鎖で縛られた乙女が竖琴のただ一筋の弦を掲げている。そして天井にはただ一つの光が見えずとも輝いている。その目下の心持のこの乙女の心持である」。先生の人生は本当に希望を失いそうになることの連続であった。同志社大学においても、また中国伝道においても、先生は大変なご苦労をされました。その中で彼は決して希望を失わず、「希望こそ自分が生きていく支えなのだ。それも信仰による希望なのだ」ということを言ったのであります。

夢を見ること、先生は桜美林大学を設立した時、「新島襄に与えられた夢であった」と書きました。ただ夢を見ているのではなく、必ず夢は実現するのだと希望を失わなかったのです。しかし、それはそんなに簡単なものではありません。清水安三は「希望を失わず」という言葉を一つの大きな座右の銘としました。それはまさに、彼が本当につながろうとした神こそが彼につながってくれるのだ、という彼自身の大きな「希望」であったのではないかと思います。

私が愛したように愛せよ、ハーバート・ニコルソンの愛

さて、今日最後に紹介するのは、ハーバート・ニコルソンという人です。この方もヴォーリス、同志社と少なからぬ関係があった人ですが、彼は直接大学で教えたことはありませんし、大きな建物を建てたり、立派な事業を残した方ではありません。しかしこの方は決して忘れてはならない方であります。ニコルソンはクエーカー、フレンド派の宣教師でありました。フレンド派はキリスト教の一派で、17世紀にイギリスで生まれた宗派です。日本では旧５千円札の肖像画で有名な新渡戸稲造がフレンド派の信徒であります。東京の三田に普連土学園という小さな学校があります。女子中高です。フレンド派の人たちは内なる光というものを大変大事にし、絶対的な平和主義を貫き、独特の礼拝で知られています。ニコルソンは１９１５年、フレンド派の宣教師として日本に赴任します。普連土学園で英語を教え、後に茨城の水戸を中心に伝道活動を行います。これまでに紹介した他の二人のように、建築物や事業、学校や病院といった見える形のものを残したわけではありません。むしろ彼は、右の手のしたことを左の手に伝えることをしなかった人であります。まさにイエスの言葉に従順に従っていた人です。クエーカーの人たちは自己宣伝をすることをしません。大変控えめで美しい。そんなクエーカーを最もよく表すのがニコルソンではないかと思います。この人については自身の生涯を書いた２冊の本があります。しかし彼の成したことは人々の記憶に残り、その記憶は必ず語り継がなければならないと私は思っています。「この年代には、めったにない珍しい青年だ。彼はイエスを本気で信じている」と言わしめたヴォーリスの「信仰」、「この『希望を失わず』の一篇を、私はなおも希望を失わずという心持で世に送り出す」とした清水の「希望」、そして最後に、ハーバート・ニコルソンの「愛」を語りたいと思います。

ニコルソンとヴォーリスそして同志社

ニコルソンと同志社に関しては、直接その関係を示す資料は残っていません。ただ、彼と日本で出会い結婚したマデリン・ウォーターハウスが、同志社女学校の英語教師として１９１７年９月から１９２０年まで働いた記録が残されています。彼らの結婚式が同志社で行われ、デントン女史が結婚式にかかわっていたことが、ハーバート・ニコルソンの著書の中に記されています。皆さんの中でお気づきになった方がいるかもしれません。ニコルソンの奥さんになった人、マデリン・ウォーターハウス、このマデリンのお兄さんが、実は先ほど言ったガリラヤ丸の船長としてヴォーリスと行動を共にしたポール・ウォーターハウスなのです。最初にお見せしたウォーターハウス邸という大きな洋館、そこが彼と彼女の家でした。マデリンとニコルソンが出会ったのも、ヴォーリスの軽井沢の別荘でした。彼ら二人は共にヴォーリスとの交流を深めた人でありました。

日系人収容所とヤギのおじさん

アメリカのロサンゼルス、ダウンタウンのリトルトーキョーに全米日系人博物館があります。この博物館には、日系人たちが太平洋戦争で大変な苦難を受けた、そのことが資料として展示されています。１９４２年、首に荷札をつけた日系人たちが強制収容されました。全米10カ所のうちの一つ、マンザナー強制収容所に収容された日系人たちについて、その当時のことを記しています。１９４２年２月19日、フランクリン・ルーズベルトによって大統領令9066号が発布された。日系人を強制収容せよという命令である。西海岸に在住の12万人近い一世と二世が、同年３月27日から都市近郊の競馬場などを利用した西海岸16カ所の仮収容所に入れられていく。その年の５月から10月にかけてアメリカ中西部の砂漠地帯や湿地帯に設けられた10カ所の強制収容所に、戦時移住局（War Relocation Authority）のもとで入れられていく。その時、彼らは首から荷札をかけられ、まるで荷物のように扱われた、と。

今年の２０１７年２月19日、この大統領令が発布されて75年目に、ニューヨークの街を同じように荷札をつけて行進するデモがありました（写真⑦）。トランプ大統領がイスラム圏の人たちの入国を拒否するという大統領令を出した。それに対する抗議を込めて、75年前の出来事を記憶するために、ニューヨークの街を荷札をつけて、多くの日系人たちや日系人を支援するアメリカ人が歩きました。

アメリカ全体が敵国日本を撲滅せよと、強制収容という形で日系人に対して憎悪をむき出しにしました。それまで家族のように親しくしていたアメリカ人も、真珠湾を攻撃されたその時から手のひらを返したようになりました。長く日本にいた日本人と親しかったアメリカ人宣教師でさえも、戦争が始まった途端に周りの目を気にして彼らから離れようとなりました。

そういう出来事の中で彼らを助けたのが、実はこのハーバート・ニコルソンでした。多くのアメリカ人たちがアメリカの日系人たちを撲滅しなければならないと思った時、日系人を助けたのが彼でした。ニコルソンはトラックを運転し全米各地の収容施設をまわり、日系人たちの荷物を届け、物心ともに励ましました。当時のルーズベルト大統領に宛て、その違法性を訴え署名活動も行ったのです。また彼は日本が敗戦になった後、日本の国に山羊を送る運動を始めます。栄養不良に苦しむ日本人に山羊を送りながら、山羊が日本人の復興のためと同時にアメリカ人の自分たちの罪の赦しのためであると、沖縄、広島、長崎を訪れ、そこで戦争の罪を告白していきます。それがハーバート・ニコルソンです。彼はこうに言っています。「キリストが彼の弟子たちに、『私が愛したように愛しなさい』と言われた。それは我々がキリストの愛に満たされた時のみに成し遂げることができる」と。ハーバート・ニコルソンは、スパイ容疑で逮捕され非国民とものしられながらも、たった一人になっても、日本の人のために働いてくれたのです。敵を愛すること、もちろんそれは困難である。「それは我々がキリストの愛に満たされた時のみに成し遂げることができる」と語り、困難な愛の業をも成し遂げられたのです。彼もまた、ぶどうの枝として連なった人でした。

さて、「信」「望」「愛」という言葉を最後に載せました（写真⑧）。これはキリスト教の大事な教えであります。「信仰」「希望」「愛」、これらはまさにキリスト教を代表する言葉で

す。ヴォーリズの「信仰」、清水安三の「希望」、ハーバート・ニコルソンの「愛」、これらがみな、つながっており、そしてこの同志社という大学がつながり、それを聞いた皆さん方一人ひとりともつながっている。そのことをぜひこの同志社スピリッツ、大事な新島先生から預かった私たちの教えとしていきましょう。

〔参考文献〕

メレル・ヴォーリズ・一柳『東と西の詩集』近江兄弟社湖声社 2010年

ハーバード・V・ニコルソン『やぎのおじさん行状記』CLC暮しの光社 1974年

杉村幸『静かなヒーローたち』東洋宣教会・北米ホーリネス教団 2014年

2017年6月1日 同志社スピリット・ウィーク春学期
今出川校地「講演」記録

写真① 同志社病院附属看病婦学校 卒業証書

写真② 旧ウォーターハウス邸
(現ウォーターハウス記念館)

写真③ 幻の新キャンパス計画

写真④ 歌碑

写真⑤ ガリラヤ丸

写真⑥ 藤樹書院の参拝録

写真⑦ 荷札を首からぶら下げ行進する人々

写真⑧

※写真の表示はホームページでは省略します。